Web公開用（抜粋）

理論的検討２　　聴覚障害児の言語運用力の評価

－「聴覚障害のある生徒の言語運用力の評価に係る質問紙」調査の結果から－

阿部　敬信

1 はじめに－学校教育における「評価」

本稿の目的は，これまで本シンポで積み上げられてきた「実践知」としての聴覚障害児の「言語運用力」について量的な評価ができないかを探るために行った「聴覚障害のある生徒の言語運用力の評価に係る質問紙」調査（以下，調査）の結果から，「聴覚障害児の言語運用力」とは何か，それらを構成する要素から量的な評価の可能性を考察することにある。

学校教育における「教育」という営みは，近年，マネジメントサイクルという言葉で語られるようになった。もともとは経営学の言葉であったマネジメントサイクルを，School based な教育課程編成に，編成・実施・評価・改善というプロセスを取り入れることにより，それまでどちらかといえば，静的な計画策定で終わっていた営みを動的な営みに転換し，より地域や児童生徒の実態にあった教育課程編成を目指すこととされるようになった。それらは学校レベルの視点から「学校経営」という言葉を生み出したり，授業レベルでは「指導と評価の一体化」という言葉を生み出したりした。特別支援学校でいうと，初めて「特別支援学校」の名称で告示された 2009 年改訂の「特別支援学校学習指導要領等」から自立活動に評価という言葉が明確にされてきている。つまり，今や教育という営みにおいて「評価」は欠くことのできない重要なプロセスであり，「評価」なくして，教育を語ることはできない。

本シンポでも「聴覚障害児の言語運用力育成」と銘打って行っているからには，「評価」は，重要なプロセスであると言える。実際に本シンポの目的が「聴覚に障害のある児童生徒（以下,聴障児生）の思春期における言語課題に迫る Good Practice を多岐にわたって積み上げ,言語運用に影響する要素を考察する」とあるように，これまでに語られてきた実践は，“Good Practice”という「評価」を経たものが積み上げられてきており,「言語運用に影響する要素」として語られてきているはずである。

実際に，本シンポでは「Good Practice の多岐にわたって積み上げ」から，「言語運用にかかわる高井モデル」（p.3 図１；以下，高井モデル）や「ことばの理解の図式」（p.61 図４）が提案され，それらには「言語運用に影響する要素」が明示されている。これは“Good Practice”という実践の語りという質的な評価の積み上げから，抽象度の高いモデル化を図ったものである。さらには，Canale and Swain（1980）による「第二言語習得研究を援用した言語運用モデル」（p.3 図２）が提案されている。そして，藤本（2017）では，ついに量的な概念に結びつく可能性が示唆される「質と適時性がからみあった言語曝露量」という提案までしている。

2 聴覚障害児教育における第二言語習得研究の意義

本稿では第二言語習得（Second Language Acquisition）研究（以下，SLA 研究）によって明らかになった知見から考察を行おうとしている。それは，聴覚障害のある子どもの言葉の育ちや言語指導にとって，SLA 研究が研究の対象とする第二言語の習得とその教授法はパラレルな関係にあるからである（阿部，2003；阿部・須藤，2005）。

SLA 研究はもともとが外国語教授法の研究からはじまったともいえるため，言語教育研究との親和性は高く，今もなお SLA 研究は言語教授法との関係で議論されることが多い。1960 年代まで主流であった，ドリルや暗記中心で口頭練習を行うにしても，文法や発音といった「形式」のみに焦点が

当たっていたオーディオリンガル教授法では，実際に外国語を使える学習者を育てることができなかった。このことに対する反省として，最初から「意味」に焦点を当てて，「意味」を伝えるためのコミュニケーション手段として外国語を使うことによって教えるコミュニカティブアプローチがSLA研究の知見から外国語教授法にもたらされた。そして，現在ではSLA研究は，認知的アプローチ（cognitive approaches to SLA）といわれる言語知識の自動化のプロセスを説明する「情報処理理論」と知識の手続き化を説明する「スキル習得理論」により，第二言語運用能力がどのように学習されるのかを明らかにしようとする研究アプローチをとることが多い（小柳，2004；村野井，2006）。

聴覚障害のある子どもは，聴覚伝導路が何らかの原因で十分に機能していないため，言語入力が不十分であり，それゆえに言語の習得が遅れ，制限のかかった弱い言語となってしまいがちである。よって，SLA 研究が対象としている学習者のように，学習者自身が置かれた環境の中で，試行錯誤しながら言語を習得していくプロセスから得た知見や教授法は，必ずしも母語（第一言語）と同様の習得のプロセスを辿れない聴覚障害のある子どもの言語の習得や教授法に有効であると考えられる。

3 「聴覚障害のある生徒の言語運用力の評価に係る質問紙」調査

3.1 調査の目的

このように，本シンポでは，小学校高学年以降の聴覚障害のある子どもの言葉の育ちを「言語運用力」という視点から教育の営みとの関連で積み上げてきている。その教育の営みに欠かすことのできない「評価」に焦点を当てて，質的かつ包括的な「評価」だけでなく，「言語運用力」を構成する要素を明示的に示し，その量的な「評価」の可能性を探ることは，「評価」をさらなる教育実践へ生かすことにつながり，結果として，より効果的な実践（Better Practice）を可能にするかもしれない。このような問題意識から調査は企画された。

調査の目的は，以上により「これまで日本特殊教育学会の研究大会において十数回にわたる自主シンポジウム「聴覚障害児の言語運用力育成」で積み上げられてきた「実践知」としての聴覚障害生徒の「言語運用力」について量的な評価ができないかを探るために行うもの」であった。

3.2 調査の方法

調査の対象者は，過去に本シンポの話題提供者，指定討論者等の役割を担った聴覚障害教育関係者であった。質問紙は14名に対して本調査の趣旨を口頭で説明した上で配布した。回答があったのは

表１　質問紙の設問内容

番号	内容
1	あなたのこれまでの経験で，聴覚障害生徒が高い言語運用力を発揮していると考えたエピソードを具体的に記述してください。どのような生徒が，どのような場面で，何をどのように用いて，どのような目的を達成できたのかを，次の欄に記述してください。
2	上記「１」で記入したエピソードを振り返って，あなたはそのエピソードをどうして「高い言語運用力を発揮している」と判断されましたか。箇条書きで，できれば３つ以上の判断した事項を，次の欄に記述してください。
3	あなたは，「聴覚障害生徒の言語運用力」と聞いて，どのような“言葉”を思い付きますか。単語で構いません。今まで自主シンポジウム「聴覚障害児の言語運用力」では，聴覚障害児の言語運用力に係る教育実践や事例，そして，それらを統合するモデルがいくつか提案されてきました。今までの自主シンポジムで語られてきた“言葉”や，今のあなたが思い付いた“言葉”で構いません。できるかぎり多くの「聴覚障害生徒の言語運用力」から思い付く“言葉”を記述してください。